

『とはずがたり』の夢

執着心を超克する女としての二条

“DREAMS” IN *TOWAZUGATARI*

金 粉 淑*

In the most famous medieval woman's diary *Towazugatari*, the word *yume* (“dream”) appears 66 times. Of these, those referring directly to dreams experienced by the author Nijo total twelve: eight dreams about herself, two dreams about Gofukakusa-In, one dream about Yuki-no-Akebono and one dream about Ariake-no-Tsuki. Nijo's dreams can be classified as (1) four dreams relating to her late father Masatada, (2) three dreams about her pregnancy, (3) one dream of the ghost of Ariake, (4) one dream warning her of the death of Gofukakusa-In and (5) the others three dream.

Those in (1) are the first and last dreams in the first volume, and form the center of the work's psychological world. They show the relationship between Nijo and her late father, hinting at Nijo's sense of unease, her sense of loss of a guardian figure, her release from her father's control, in addition to expressing her psychological and physical state and her new “discovery” of her father's role. The dreams in (2) utilize the dream format as a new

*KIM BunSuk 東亜大学校日語日文学科卒業。東北大学大学院国文学修士。博士課程三年退学。現在東亜大学校副教授。主な専攻分野は日本中世文学。著書『徒然草の研究』『日本語』、訳書『二度とない人生だから』『日本文学史』、論文「兼好の人間観－特に『よき人』を中心として－」「『とはずがたり』における二条の心情をめぐって－『はかなし』から『無常』へ－」などがある。

narrative method , in which the author's pregnancy and birth are announced within her dreams. The dreams of (3) (4) and (5) disclose an outpouring of desires directed toward specific lovers.

This summary of dreams in Towazugatari reveals an attachment to various persons and a transformation from a “systemized” time sphere to a “festive” time sphere, as well as showing a change in Nijo's intellectual stance from a “non-medieval” to an “anti-medieval” one.

はじめに

一般に、文学作品における〈夢〉の表現や叙述の内容を分析し、総合する作業が、作者の、作品執筆の動機や意図、登場人物（＝主人公）の性情、人生観照の諸相を探り、更には作品の成立事情、主題、構造、プロットの展開、特質、方法等を深層から照射するための有効な方途であることは言うまでもない。

日記（＝自伝）文学についての定義は、いまだ十分に確立しているとは言えないが、フランスの自伝研究者、パリ第十三大学教授フィリップ・ルジュヌヌ著『フランスの自伝－自伝文学の主題と構造－』^①『自伝契約』^②等を参照して、中川久定は、次のように述べている。傾聴すべき提言である。

自伝（＝日記文学）とは、自分とはなにかを問うジャンルである。それに答える時、自分とは過去にいったいなんであったかを示すことによって答える。しかし自分とはなんであったかを示すというのは、たんに過ぎ去ってしまった過去を示すことではない。自分はこれから先－もし可能であればこれから先－再びどうありたいかを選び取ることである。つまり、過去の自分を描き出しながら、しかもその過去を自分の永遠の願望に従って意味付け、そしてそれを未来に差し出していくジャンルである、と定義できるように思います^③。

以上の定義からも明らかなように、特に自伝的・回想的・自照的傾向の著しい日記文学の場合は、〈深層としての夢〉、〈方法としての夢〉の内奥に深く踏

み入ることがまず第一に強く要請されるはずである。

従来、このような視点からの考察として、今関敏子「『とはずがたり』における夢の記述をめぐって」^④をはじめ、藤井佐美「『とはずがたり』構想論－夢の記録をめぐって－」^⑤等を挙げることができるが、二条の人物像を求める私の問題意識の所在とは基本的に異なるものであることを断っておきたい。

I

『とはずがたり』の中には、「夢」の語及び〈夢〉にかかわる記事が66例^⑥ほど見られるが、そのうち、作者二条にかかわる〈夢〉の記述は、二条の夢8例、後深草院の夢2例、雪の曙の夢1例、有明の月の夢1例、すべて12例^⑦を数える。当代の女流日記と比べてみても、『とはずがたり』の用例の多いことが分かる。このことは、二条が〈夢〉を信じ、それに心を寄せることがいかに強かったかの証左とも言えよう。ここでは、その〈夢〉が、二条の人生にとってどのような意味を持っているか、そしてまた、彼女の人生観照や人物像の上で、いかなる位相を示しているかを、文脈にそって探ってみたいと思う。

まず、『とはずがたり』の〈夢〉の記事とその内容を記述の順序に従って挙げてみよう。

- ① 今年は叶はぬ事なれば、門の外まで参りて祈誓申しつる心ざしより、うば玉の面影は別に記し侍れば、これには漏らしぬ。(巻一、63ページ)
- ② 人に倚りかかりてちとまどろみたるに、昔ながらに変わぬ姿にて、心苦しげにて後の方へ立ち寄るやうにすと思ふ程に、皇子誕生と申すべきにや、事故なくなりぬるはめでたけれども、それにつけてもわが過ちの行く末いかならんと(巻一、63～64ページ)
- ③ 「うば玉の夢にぞ見つる小夜衣 あらぬ袂を重ねけりとは」さだかに見つる夢もがな(巻一、65ページ)
- ④ 塗骨に松を蒔きたる扇に銀の油壺を入れて、この人の賜ぶを、人に隠して懷

に入れぬと夢に見て、うちおどろきたれば、暁の鐘聞ゆ。(中略) そばなる人、同じさまに見たる由を語る(巻一、66ページ)

- ⑤雪の曙は、跡なき事を嘆きて、春日に二七日籠られたりけるが、十一日と申しける夜、二の御殿の御前に昔に変らぬ姿にて待ると見て、急ぎ下向しけるに、(巻二、136ページ)

- ⑥さても今宵不思議なる夢をこそ見つれ。今の五銚を賜びつるを、われにちと引き隠して懷に入れつるを、袖をひかへて、『これほど心知りてあるに、などうかは』と言はれて、わびしげに思ひて涙のこぼれつるを払ひて、取り出でたりつるを見れば、銀にてありける。(中略) 立ちながら取ると思ひて、夢さめぬ。今宵必ずしるしある事あるらんとおぼゆるぞ。もしさもあらば、疑ふ所なき岩根の松をこそ(巻三、165ページ)

- ⑦わが身が鴛鴦といふ鳥となりて、御身の中へ入ると思ひつるが、かく汗のおびたたしく垂るは、あながちなる思ひに、わが魂や袖の中留まりけん(巻三、190ページ)

- ⑧ありしに変らぬ面影にて、「憂き世の夢は長き闇路ぞ」とて抱きつき給ふと見て、(中略) 夢の面影、うつつに車の中にぞ入らせ給ひたる心地して、絶え入りにけり。(巻三、197ページ)

- ⑨今一度この世ながらの御面影を見参らせずなりなんことの悲しさなど、思ひ寄る。あまりに悲しくて、七月一日より八幡に籠りて、武内の御千度をして、このたび別の御事なからん事を申すに、五日の夢に、日蝕と言ひて、「あらはへ出でじ」と言ふ。(巻五、300～301ページ)

- ⑩昔ながらの姿、われも古への心地にて、相向ひてこの恨みを述ぶるに、「祖父久我相国は落葉が峰の露の色づく言葉を述べ、われは『おのが越路も春の外かは』と言ひしより、代々の作者なり。(中略) 具平親王よりこのかた、家久しくなるといへども、和歌の浦波絶えせず」など言ひて、立ちざまに、
なほもただかきとめてみよ藻塩草人をも分かず情ある世に

とうち詠めて、立ちのきぬと思ひて、うちおどろきしかば、空しき面影は袖

の涙に残り、言の葉はなほ夢の枕にとどまる。(巻五、314～315ページ)

⑪この時、一人の老翁夢に示し給ふ事ありき。この面影を写しとどめ、この言の葉を記し置く。(巻五、315ページ)

⑫故大納言のそばにありけるが、「出御の半ば」と告ぐ。(中略) 白き箸のやうに、本は白々と削りて、末には榊の葉二つづつある枝を、二つ取り揃へて賜はると思ひて、うちおどろきたれば(中略) 何となくそばを探りたれば、白き扇の榊の木の骨なる、一本あり。(巻五、319～321ページ)

以上12例のうち、二条が見た〈夢〉が8例(①②④⑧⑨⑩⑪⑫)、院が見たのが2例(③⑥)、雪の曙が見たのが1例(⑤)、有明の月が見たのが1例(⑦)である。

夢の内容を分類してみると、〈夢〉で亡父雅忠が出てくるのが4回(①②⑩⑫)、妊娠の夢告が3回(④⑥⑦) 亡き有明の月の霊夢が1回(⑧)、院の死を予告する〈夢〉が1回(⑨)、その他3回(③⑤⑪)ということになる。

Ⅱ

古典文学にとって〈夢〉は、欠くことのできない大事な構成要素やモチーフの一つであつたらしい^⑧がそれでは一体、そうした〈夢〉はどのような意味を持ち、どのような文学的機能をはたしていたのであろうか。

まず、『日本国語大辞典』(小学館、1981・4)によると、

①睡眠中に、いろいろな物事を現実のことにように見たり聞いたり感じたりする現象。多くは視覚的性質をもち、覚醒時の刺激の残存や身体内部の感覚的刺激に影響されて起こるもの。

②覚醒中に視覚的な性質を帯びて現われる空想や想像で、それに引き入れられて放心状態になるようなものをいう。

③(①を比喩的に用いて)ぼんやりとして不確かなさま、はかないさま、頼みとならないさまなどをいう。

④心のまよい。

⑤将来、実現させたいと思っている事柄。

⑥現実のきびしさから隔絶した甘い環境や雰囲気。

など、様々な意味があることがわかる。

では、心理学において〈夢〉はどのように説明されているだろうか。『新版心理学事典』(平凡社、1981・11)によると、次のとおりである。

夢とは、睡眠中に生じる自覚的体験のうち、明瞭な感覚性心像をもつものをいう。夢と睡眠中の思考体験とは判然と区別しがないときがあるが、その体験のなかでの自分が覚醒時との自己同一性が維持されている場合には、夢とはいわずに睡眠中の思考とされる。

両書の〈夢〉についての説明には大差はないと思うが、〈夢〉を科学的研究の対象として取り上げたフロイトは、『精神分析入門』の中で、

夢は無意識内にある願望と、日中の体験の残りとによる潜在的夢思考が意識によって把握されたものであるが、その際、意識-前意識系はその存在を無意識的願望の受け入れによって脅かされぬように検閲を行なう。しかがって人間が見る夢は検閲後の顕在夢であり、その下には潜在的夢思考が隠されていると考える。

と、〈夢〉の解釈をとおして、顕在夢から潜在的夢思考を探りあてることが出来るといっている。

つまり、〈夢〉を信じるか信じないかは、その時代の文化や精神の構造によって違っても、「〈夢〉が一つの独自の『うつつ』である点は、古人も今人も別に変わらない」^⑨し、ましてや一個人が体験した〈夢〉がその人の生にとっては大きな意味を持つのは確かなことである。かつて自分が経験した様々なことを書き残した日記の場合は、その中で取り上げられている〈夢〉を分析することによって、その作者の心情や人物像はもちろんのこと、ひいては作品の成立契機や文学的構造とのつながりをも把握できるものと思う。

Ⅲ

さて、二条が見た8回の〈夢〉の内容をさらに分類すると、亡父雅忠に関する〈夢〉が4回、二条自身の懐妊に関する夢告が1回、亡き有明の月の霊夢が1回、院の死の予告の夢1回、老翁の夢1回ということになる。

しかも、全部で8回のうち、4回も亡父の夢を見たというのは二条にとって父親への意識がいかに強かったかを暗示することでもある。

それは、二条自身が父の死を迎えて次のように述べていることから十分に推測できる。

母には二つにて後れにしかども、心なき昔は覚えずして過ぎぬ。生を享けて四十一日といふより、はじめて膝の上に居そめけるより、十五年の春秋を送り迎ふ。朝には鏡を見る折も、誰が陰ならんと喜び、夕に衣を着るとても、誰が恩ならんと思ひき。五体身分を得し事は、その恩、迷廬八万の頂よりも高く、養育扶持の心ざし、母に代りて切なりしかば、その恩、また四大海の水よりも深し。何と報じ、いかに報いてか余りあらんと思ふより、折々の言の葉は、思ひ出づるも忘れがたく、今を限りの名残は、身に代へてもなほ残りありぬべし。(巻一、43ページ)

と、早くも母に死なれ、父親の愛情によってのみ育てられたという意識と感謝の気持ちが切実に述べられる。また、異腹兄弟が多くある中でも「おのれ一人に三千の寵愛をみな尽したる心地を思ふ」(巻一、40ページ)と自分に愛情を注いでくれた父の心をしみじみと噛み締めるのである。

とくに②の〈夢〉は、二条が十六歳で、院の子を出産する時、亡き父が現れ、生前と変わらない暖かい目で自分を見守ってくれていると思った瞬間、「皇子誕生」という大変めでたいことがあった。子を無事出産できるかどうか、陣痛に大変苦しんでいる時、〈夢〉に現れた父の姿を見て、安心したというのは、二条にとって親は父親だけを指すのであり、無意識のなかで父親像がいかに大きな位置を占めていたかを示すものである。しかし、父の〈夢〉をみた二条は、安心感と同時に「わが過ちの行く末いかならん」と急に罪意識による不安感

に襲われる。

二条は表向きでは明らかに院の寵愛を受けて、皇子までも産んだけれども、実際には院の目を盗みながら、雪の曙という愛人と密会をしており、その上、彼女の真の愛の相手は院よりも愛人雪の曙であることを亡父だけは知っているだろうと思ったからこそ急に恐れを感じたのであろう。というのは、父雅忠が二条に次のような遺言を残しているからである。

君に仕へ世に恨みなくは、慎みて怠る事なかるべし。思ふによらぬ世のならひ、もし君にも世にも恨みもあり、世に住む力なくは、急ぎてまことの道に入りて、わが後生をも助かり、二つの親の恩をも送り、一つ蓮の縁と祈るべし。世に捨てられ頼りなしとて、また異君にも仕へ、もしは、いかなる人の家にも立ち寄りて、世に住むわざをせば、亡き後なりとも不孝の身と思ふべし。夫妻のことにおきては、この世のみならぬ事なれば、力なし。それも、髪をつけて好色の家に名を残しなどせんことは、返す返す憂かるべし。ただ世を捨てて後は、いかなるわざも苦しからぬ事なり（巻一、40ページ）

二条にとって唯一の精神的頼り所であった父の最期の言葉は「もし、院の寵愛を失うようなことになったら、潔く出家せよ。世間に見捨てられ、頼る当てがないからといって、院以外の男性に身を寄せることがあったら、たとえ自分が死んだ後であっても、つらく思われてならない。」というものであった。しかし二条は、父の死後まもなく、あれほど切実だった父の遺言を裏切って、院の寵愛を受けていながら、隠れて雪の曙という愛人に溺れていく自分の心情を父だけは分かってくれていると思ったことだろう。いつも頭の片隅では忘れたことがない父への思慕の念が、自分が院の子を出産という大事な時に〈夢〉に亡父が生前どおりの姿で現れ自分を見守ってくれる。それによって、二条は深い安心感を覚えると同時に、父親を頼り所として大きな力を得るという「潜在的夢思考」の結果、二条は無事に「皇子誕生」を成し遂げたのである。同時に亡父は、自分が院を裏切って、愛人とも関係を持っていることについて怒って

いるだろうと思うと、自らと良心の呵責を深く感じるに至る。

従って、無事出産を終えると同時に、父への罪意識がうずくのは、自らの行動が父の期待への裏切りであり、父の失望感を招くものであることに思い至ったがゆえであったのだろう。

しかし、院の寵愛を受け、院の御子を宿している一四歳の娘に向けて、なぜ、父雅忠はあのような遺戒を残したのであろうか。

まず、考えられることは、二条に経済的な力がないということであろう。二条は、二歳の時に母に死なれ、その母方からの遺産については一切触れていないので、母方からの遺産相続はなかったものと思われる。

一方、父雅忠は再婚し、その間には二条と腹違いの兄弟がいたので、二条自身は財産の分与にもあずかれない立場にあったと推測される。だから、たとえ二条が院の御子を産んだとしても、その子供を大切に育てることで彼女の位置を確かなものとするためには、なによりも経済力のある後見役が必要になる。日記で見る限り、二条自身父の死後、たまに御所から里帰りする時も安心して帰る家がないことからみても、彼女が経済的に不安定な立場にあったことは確かであろう。

このように経済的基盤のない愛娘を一人残して死んでいく父親としての気がかりは並大抵のものではなかったことと思われる。

したがって、経済的後見のない孤児としての二条の将来を考えると、もし最悪の場合でも、尼になって最低の食と住まいだけは確保できるようにとの心やりを遺言で示したものであると考えられる。

高群逸枝によれば、当時、鎌倉南北朝期頃からは、女の身柄が自族をうごかなかった純婚取婚から次第に妻が夫家の本第に迎えられて行く擬制婚取婚の形に移行していき、現実の立場での女の財産の帰属については、生家側からも、夫家側からも、警戒すべき点が多くなり、鎌倉幕府の意図も、女の財産への規定のほとんどが、女の財産の縮小、または、没収にあった、といわれるように女の財産権は急速度に衰退していった。^⑩

また、脇田晴子によれば中世の女性の一生は「天皇家、宮家、五摂家をのぞく、中、下層の公家貴族の娘たちは、目上の貴族家へ女房（女官）勤めに出るか、対等の家との正式婚姻による妻となるか、尼となるかであった」という。更に、「石清水文書」を引いて「女には財産がゆずれないから、路頭に迷うだろうと案じられるので、なるべく尼になるように」と、財産の譲渡を受けなかった女子の最後の処世の道は「尼」となることしか残されていなかったとも説明している^⑪。

要するに、尼になれば最低の生活だけは保障されるものの、尼僧としての生活はかなり悲惨な場合も多かったと見られる。

『とはずがたり』の中でも尼の悲惨な生活ぶりを彷彿させる場面がある。

さまざまの事ども用意して、（中略）主の尼達の取り散らすべき物など分かちやる。「年の暮の風の寒けさも忘れぬべく」など言ふほどに、念仏の尼達の袈裟・衣、仏の手向になど思ひ寄らるるに、「いよいよ山賤の垣ほも光出で来て」など面々に言ひ合ひたるこそ、（巻一、61ページ）

これは二条が醍醐の勝倶胝院に籠もっているところに、院が訪ねてきた時には、尼達は「ゆゆし」「めでたし」という者は誰もいなかったのに、愛人雪の曙が訪ねて来て、みんなにそれぞれの日用品や仏への供物などを与えたことに、寒さも忘れ、その上、御仏の有り難い御光りが訪れたと喜んでいる姿を記した一節である。これをみても分かるように、院という至高の人の御幸よりも、実質的に自分達の生活に役立つ物を供与してくれる人が、それが、たとえ許せない不倫関係の者であっても構わないほど尼達の生活状態は窮乏していたことがよく理解できる。

それからまた、父の遺戒からもう一つ考えられることは「世を捨てて後は、いかなるわざも苦しからぬ事なり」という言葉の持つ意味についてである。この箇所本文の解釈にはさまざまな見解が行われているが、要するに、出家することによって一個の自由な人間としての特権を享受できるという意味であろう^⑫。

自由な人間というのは、自由な生き方が出来る自律的な人間と解してもいいと思われる。

中世には多様な生き方があった。その中で、「女性が一人の男と添い遂げることを美德とする観念は充分確立しておらず、女性は性を解放して新しい可能性を求めることができた。(中略) 女性に貞操観念を求めることはないので、女性の努力によって新しい伴侶を得る事は充分可能であったのである」^⑬と飯沼賢司が述べておられるように、中世には性を解放し、それを生きる一つの方法として考えた女がそれほど社会から蔑視されたり、問題視されたりすることはなかったようである。その上、鎌倉前期の女の一生、特に、経済力のない女は、経済力を持っている男と結婚して家を構えるかまたは尼になって最低の生活の保障を受けるかであったので、結婚する相手は必ずしも一人の男に限定されるという考えはなかったのである。

雅忠も、一人残される愛娘二条の将来を考えると、今は院の寵愛を受けてはいるが、好色の院のことを十分考慮したあげく、実質的に経済的援助ももらえない院に執着しないで、経済的後見としての男をみつけるのがいい、という考え方を遠回しの方法で、もし院から捨てられたら、姿を変え、その後は新しい伴侶でも見付けて経済的に安定した家を構えてほしいというのが本音だっただろう。それが「いかなるわざも苦しからぬ事」であったと思われる。家父長権の強化のもとで、女性の存在価値が家父長の後継者を産み育てることにあった時代に、経済的後見がない二条が、たとえ院の寵愛をうけ、その子を産んだとしても、その子を大切に育ててくれる家がなかったのは自明のことである。したがって、二条の立場からいうと、経済力がないので家を構えない、家がないので、それを受け継ぐ子もいない、残された道は尼僧になる方法しかなかったのかもしれない。

普通の日常生活を通して、父の子としての意識が強かった二条にとって、このような父の遺戒は肝に銘じていたに違いない。

それが出産という大事な時、〈夢〉で父が現れるだけで、二条の無意識内に

ある父へ依存する強い願望が受け入れられて、安心して無事出産という結果となったと思う。

以後、彼女は妊娠と出産を繰り返すが、〈夢〉で父が現れたことは院の子を出産する時だけであった。あれほど父への意識が強かった二条の〈夢〉に父は二度と現れなかったのである。

女性にとって妊娠と出産という一番大事なときに父が二度と現れなかったことは、かえって二条が意識的に父の目を避けようとした結果かも知れない。二条は院の子を出産して以後は、院のみに縛られず、次から次へと別な男性と関係を持ち、妊娠し、出産する結果になったからである。

Ⅳ

二条の妊娠への夢告は3回（④⑥⑦）記されている。④の〈夢〉は二条十六歳の時の12月に見たものである。院の目を盗みながら雪の曙と密会を続けている時に見たのは、雪の曙に与えられた蒔絵の骨の扇に銀の油壺を入れ人に隠して懐中に入れたという〈夢〉であった。隣でいっしょに寝ていた雪の曙も同じ〈夢〉を見たことを知ってその〈夢〉の結果に不安がる二条であった。これはまさしく妊娠への夢告であったのである。

江口孝夫はこの夢について「歓楽極まった後の密事の露見、不安懊悩」^⑭であると言っているが「歓楽極まった」の表現は二人の関係をやや軽く認識しているようである。歓楽極まるという表現は、どうしても男女の一時的な情事のことを指すようであるが、二条と雪の曙の仲は二条が院の女になる前からずっと愛し合って来た関係であったと思われる。日記の冒頭は彼女の十四歳の元旦の時、始めて一人の女房として出仕したことから書かれているが、元旦の夕方には、はやくも雪の曙が登場している。

「昨日の雪も今日よりは跡踏みつけん、行く末」など書いて御文あり。

紅の薄様八つ、濃き単、萌黄の表着、唐衣、袴、三つ小袖、二つ小袖など、平包みにてあり。（巻一、12ページ）

求愛の手紙と共に美しい衣装を贈ってくれる。衣を受け取るということはただの男・女の関係ではありえないことであろう。衣を受け取るということは、相手の人の魂を受け入れることでもあるのである。二条もこの点を熟知した上で彼から贈られて来た衣装を受け取ったと思う。それに彼女は、しかしながら、翌々日、後嵯峨天皇の御幸の御所へ早速その衣装を着用して、晴舞台へ出仕したのである。

二条と雪の曙、この二人の関係は自分達の思い通りにいかず、まもなく二条は院に仕える女になってしまう。しかし、二条は院の要求を簡単に受け入れることはしなかった。院との初夜を拒みつづけ、翌日の院からの後朝の手紙には返事も出さず、家族みんなを困らせたのに、雪の曙から贈ってきた歌「今よりや思ひ消えなん一方に煙の末のなびき果てなば」（巻一、19ページ）もし二条が院だけになびいてしまうならば、自分は死んでしまうだろうという歌に対して、二条はすぐに返歌をする。「知られじな思ひ乱れて夕煙なびきもやらぬ下の心は」（巻一、19ページ）あなたへの愛にも引かれて思い乱れ、どちらへもなびき切れずに悩んでいる自分の本音を分かって下さいという返歌を通して、「自分の意思とは無縁に、院の要求は拒否できない命令でもあるので受け入れざるを得ない。だが、自分が愛しているあなたへの最大の愛情のあかしとして、昨夜は院の要求を一晩中拒んだことだけはせめて分かって欲しい」という自分の本音を相手へ積極的に訴えるのであった。絶対的な権力の持ち主でもある院の要求を一回でも拒んだことは、普通の女性には出来ないことであると思う。二条は自分が雪の曙を愛していることを示すために自分でできる精一杯のことをやったのである。しかし、拒むのも初夜だけで、翌日の夜には院の愛を受け入れることになる。

しかたなく院の女になり、寵愛をうけながらも、隠れては雪の曙との愛人の関係をも続けたのである。森安理文は「女には躊躇と大胆とが併行する。躊躇は大胆な行為へのステップ」¹⁵なのであるといているように、二条も院の女になったのに、更に、雪の曙とも深い関係になるのには躊躇もしただろうが、

彼への自分の感情にも忠実に従って、自然と不倫関係という大胆なことをした
ものと思われる。だから、二条と雪の曙との関係は一時的なことではなかった
はずである。

それに、夢で見た塗骨、扇、銀の油壺はすべて、妊娠を暗示するものである
が、予想どおり二条は雪の曙の子を妊娠してしまう。不倫の相手の子を妊娠し
たことにさすがの二条も院に知られることだけは大変心配するが、その生まれ
て来る子供についてはいかなる想像も、期待や願望もほとんど示さない。

すでに、二条は院との間で皇子をもうけているが、その皇子についても一切
期待を持つことがなかった。そのことについては前にも触れたが、たとえ、院
の寵愛を受け、皇子を産んでも強力な後見もないし、その上、経済的力もない
孤児意識の二条は、皇子の母親としての将来に対して、それほど希望を持つわ
けにもいかなかったのであろう。だから、彼女は皇子にも期待を持てなかつた
ように、これから産まれて来る子供についても母親としての願望や期待を持て
なかったのである。

この点は当時の女の一般的な生き方とはずいぶん違うところである。それは
「宮廷や鎌倉将軍家における一夫多妻制のなかで、女房たちは生母となること
によって出世するという好運をつかむことができた。というよりも、そこにし
か自分の能力を発揮する機会に恵まれなかったといった方が正確であろう」¹⁶
というように、女として自分の立場を確立するためには「子を産む」ことが絶
対条件だったとされる中世の女性の、子供への執着の強さと対比して見れば十
分に理解できるからである。

それなのに二条は、絶対権力者である院はもちろん、権勢者の二人の男性と
の間で子供ができて、産まれて来る子供に対しても、また、その子供の父に
対しても将来への一切の期待や願望を示そうとはしない。それは、二条が生母
となることで確かな地位を求める女としての可能性を放棄し、性を解放して自
由な女としての生き方を選んだからである。だから、たとえ二人の間で子供が
出来ても、その子供を媒介にして家を構えるという考えがなかったから、最初

から子供への期待も願望も持たなかったのだろう。

その後、二条は無事に女子を出産するが、その子は、産まれるとすぐ、流産ということにして、父親である雪の曙によって処理される。

しかし、そのような二条と雪の曙の二人の関係を院はずっと以前から分かっていたかも知れない。

③の〈夢〉は院が見たもので、二条が④の〈夢〉を見る直前のことである。二条は、院が自分以外の男と枕を交わしている〈夢〉を見たことに対して少し厚かましいとは思いながらもさりげなく、「ひとりのみ片敷きかぬる袂には月の光ぞ宿り重ぬる」いっしょに寝ていたのは他の男ではなく月の光である、となかなかしゃれた返歌を贈るのである。〈夢〉には伝達機能があると信じられたいた当時の通念からいうと、まさに〈夢〉というより現実であるかのような院の言葉は大変恐れるべきなのに、たとえ、歌の表現技巧上のこととはいえ、なんの憚りもなくうそをつくということは当時の感覚からもずいぶん外れていたと言えるだろう。普通ならば絶対権力者である院の妻として、皇子までも産んだ彼女が院の目を盗みながら愛人と密会しているのを、まさに見ているかのような手紙が贈られてきたのだから、きっと大変恐れて、恐怖に怯えるはずなのに、彼女はさりげなく「月の光」と弁明をするのである。

その時の二条の心中は、大胆にももう院に分かれてもしかたがないと思っていたのではないか。これほど正式の夫でもある院に嘘をつくということは、二条は院よりも雪の曙をより愛していることの証拠でもあるし、一人の男性にこだわらず、性を解放した自由な精神がこのように大胆とも見える行動を生み出したと思う。ここには時代を越えた女としての自意識を持った強かな二条の性格をもうかがうことができる。

続いて、⑥の〈夢〉は、院が見たものであるが、院は自分の異母兄弟である有明の月が二条への恋心で悩んでいることを知って、「さて、広く尋ね深く学するにつきては、男女の事こそ罪なき事に侍れ。逃れがたからざらん契りぞ、力なき事なり。(中略)畜類・獣に契るも、みな前業の果す所なり。人よくす

べきにあらず」(巻三、169ページ)と男女関係というのは人間の力を超えた、前世からの宿命として受け入れなければならないとの理解を示して、自分の妻でもある二条を、進んで有明の月の恋心が成就できるよう取り計らうのである。有明の月は院の異母兄弟であり、当代真言密教の第一人者で、仁和寺のお室だった性助法親王である。彼は二条に一目惚れして、執拗に自分との関係を要求する。有明の月のあまりにも積極的で、なおかつ執拗な愛の告白を受けて、二条も最初は興味半分彼と肉体関係を結んだが、それっきり終わったのを院の取り計らいで再び、二人は深い関係に入るようになったのである。そんなときに見た院の〈夢〉を、院自身は、二条が有明の月の子を懐妊し、その子を院が我が子として養育する夢告であると解釈する。

その後、院の〈夢〉は的中し、二条は有明の月の子を懐妊し、無事にその子を産んだ7日の後、有明の月は⑦の〈夢〉を見たのである。

有明の月が鴛鴦と化して、二条の体内に入ったという〈夢〉であった。二人は不思議に思ったが、それはやはり二条は有明の月の二番目の子を懐妊することの夢告であったのである。〈夢〉を見てからまもなく有明の月は当時の流行病にかかりあっけなく亡くなってしまう。

二条は有明の月の死の知らせを聞いて、「夢に夢見るよりもなほたどられ、すべて何と言ふべき方もなきぞ、われながら罪深き、」(巻三、192ページ)悲しみの絶頂の心情を表わしている。二条は、有明の月の死は自分の罪による報いであるとまで考えるくらいに彼の死に大変な衝撃を受ける。

二条自身、始めは好きで彼と深い関係に入ったのではない。二条と有明の月の始めの出会いには二条十八歳の時、建治元年(1275)の九月である。院の御所で修法が行われたとき、二条に一目惚れした高僧有明の月の執拗な求愛攻勢に、二条は煩わしさを感じ、「薄様の元結のそばを破りて、『夢』といふ文字を一つ書いて、参らするとしもなくて、うち置きて帰りぬ」(巻二、106～107ページ)と「夢」の一文字だけを送るぐらいの反応しかなかったのである。しかし二人の関係は「夢」から始めて「夢で夢見る」ほど有明の月の死を信じがたく、

悲嘆にくれる二条をみると、まさに二人の関係は一夏の夜に見た〈夢〉のような気がしないでもない。

以上、④⑥⑦の〈夢〉はそれぞれ懐妊の夢告であるが、相手の男性は全部違う。二条は表向きは院の女でありながら、雪の曙、有明の月の子を妊娠するのであるが、二条自身が懐妊の夢告を見たのは、雪の曙の子を妊娠した時だけであって、それ以外は相手の男性が見た夢告がそのまま的中する夢だった。

女が妊娠するということは、女自身の一生とも関連して精神的に大きな意義を持つものと言える。ましてや中世の女の存在価値が後継者を産んで自分の地位を確かにすることにあるとしたら、二条のように、院という至高の子を妊娠したことに大きな夢を託すべきだったのに、妊娠した時にはなんの〈夢〉も見えていなかったし、皇子を産んでも、その皇子に期待や願望も持つことはなかった。また、雪の曙という当時の権力者の子を妊娠しても、その子についても同じだった。それなのになぜ妊娠の夢告が記されているのだろうか。

二条は子を産んで、家を構え、それによって、自分の立場を確かなものにするという女としての通常な生き方を捨てて、父の死後、早い時期から、性を解放し新しい可能性を求めて自由な女としての生き方を選んだ。彼女の潜在的意識には、子を媒介にして、出世するという意識は毛頭なかったから、彼女は関係を持った男との間での妊娠は意識的に避けたのであろう。

ところが、現実懐妊するに及ぶと、自身の体に起こった現象であるにもかかわらず、相手の〈夢〉をとおして妊娠の事実を明らかにする、という叙述でもって日記を書きすすめていく。つまり、二条は〈夢〉の表現を借りて、言い換えれば、〈夢〉を語りの方とすることによって、少なくとも三人の男性との間にできた子供を生んだという事実を間接的に、それゆえにかえって鮮烈に語り明かしているのである。そうした方法を用いざるを得なかった彼女の意識の深層には、父の遺戒のうち、「世を捨てて後」という教えを守らなかったことへの罪意識が底流し、したがって、〈隠すこと〉と〈あらわすこと〉との二律背反を克服する道として〈方法としての夢〉〈夢の方法化〉が選びとられる

ことになったものと考えられる。

これはまさに、二条が父雅忠の遺言とおり、出家への道を捨て、その当時の拘束された「性」の意識を解放して、新しい相手を求め、それを自分の生きる術、生きるあかしとしたことの証左と言えるだろう。

だから彼女は子供を産んでも、その子供への執着は全然なかったといっても過言ではない。一般的に「家を構えない、疎外された『性』を送らざるを得ない層の女性が多く婚姻外出生をした場合に、子供を育てられないで捨子、嬰兒殺害を行なった」¹⁷⁾といわれるように、二条自身も支配階級の女性とは言え、経済的後見もない、自分の家を構えることもできない女だったので、たとえ、皇子を産んだとしてもそれを育てる力がない以上、最初から子への願望や期待、愛情など持てなかったのであろう。

二条は子供にも執着しなかったように、関係を持った男達へも執着しなかった。彼女は彼女と関係を結び、二人の間で子供が産まれても、それをもって、その男に何も求めなかった。むしろ彼女の方から自分のすべてを与えたのである。彼女は何人もの男性をそれぞれ彼女の方式で愛し、そのことにためらいや後悔の念を持つことはなかったのである。

彼女は、中世の女姓たちの多くが子を産むことで確かな自分の立場を得る常道的な生き方とは違う人生の道を選んだ。母性としての女の生き方を捨てて性を解放したこだわりのない一人の自由な女としての生き方を選ぶことによって、複数の男性とそれぞれ充実した関係を持ちながらも、誰にも束縛されない生き方が可能だったのである。

家にも拘束されず、何人かの男をも彼女なりの方式で愛し、性を解放した自由な女として自分の感情にも忠実に従った二条を、単に多情な女と評することは出来ない。

飯沼賢司の述べるように、

彼女の人生は人との出会いであり、愛も旅も同一のものであったような気がする。その出会いは一期一会であり、永遠の絆を決して求めなかった。

子に執着することなく旅することを選んだのも、そのような彼女の人生観であった。彼女は絆を断ち、もっとも感情に対して純粋に生きた女性であったといえよう。^⑮

との意見は十分に説得力があるように思われる。

二条はその場、その時の人との出会いを大切にし、また、真剣に思い、その結果に対していかなるこだわりも持たず、自分にも相手にも束縛されない自由な生き方を選んだのである。

だから、二条は生前、合わせて五人の子供を産むが、全部里子として出したりにして、子供への思い出には一切触れていない。

V

⑨の〈夢〉は、尼僧として、諸国修行の途次、偶然、院が病気にかかったのを聞いて、心配している時、夢見たもので、院の崩御の夢告であった。二条四十七歳の時である。院の崩御を聞き、その葬列を泣きながら、裸足で追っていくが、まにあわず、「事果てて、空しき煙の末ばかりを見参らせし心の中、今まで世に永らふるべしと思ひけん」（巻五、306ページ）と、院の死を契機に果たして自分の一生は何だったのかを考えることになる。

四歳から御所で院に養育され、十四歳では院の女になり、二十六歳で院から御所を退出させられるまで、彼女の前半生を支配してきた院であった。だから、彼女の修行行脚には院の存在が重く背負わされていたのである。

それは昔の自分の生活の中で、思い出したり、述懐する人は、父を除くと唯一院だけであったことからよく分かる。

したがって、彼女の過去を支配してきた院の死を契機に、彼女はより精神的に自由になったものと思われる。そして、家も家族も持たず、子供を捨て、自由な女の道を選んだ二条にとって、帰るべき最後のところは雅忠の娘としての時空間であった。

⑩の〈夢〉は、父の三十三回忌に菩提所から帰った夜に見たものである。

父が現れ、自分の歌が『新後撰集』に漏れた恨みを述べ、いずれは分かってくるだろうから、歌道に一層励むよう二条に言い残して立ち去った〈夢〉である。

〈夢〉から覚めてもありありと父の面影を忍び、二条自身具平親王の子孫としての家門への出自に誇りと自負心に燃える。

続いて、⑫の〈夢〉でも父が後深草院に仕えている生前の姿を見る。父の生前の姿は彼女に昔どおりの親子の感情を呼び起こし、安堵感と同時に、今まで、彼女を支配してきたすべての俗世からも自由になることができたのである。

日記の中では全部で12例の〈夢〉の記述があるが、始めの〈夢〉にも亡き父が現れ、作者を安堵させるし、また、最後の〈夢〉にも父の姿を見て、これまで自分が生きてきた道を父が認めてくれたものと安心する。

この〈夢〉の記述を通して考えてみると、二条の潜在的夢思考には「父の存在」がいかに大きく作用していたかが分かる。

だから、二条はあれほど波乱に富んだ人生のすべてが自分の形見であると、日記の跋文に書き残すことができたのであろう。

身の有様を一人思ひゐたるも飽かずおぼえ侍る上、修行の心ざしも、西行が修行の式、羨しくおぼえてこそ思ひ立ちしかば、その思ひを空しくなさじばかりに、かやうのいたづら事を続け置き侍るこそ。後の形見とまでは、おぼえ侍らぬ。(巻五、330ページ)

と、すべての現実から自由に飛翔する一人の女の人生遍歴を、当代の価値基準を超えて、素直にたんたんと受けとめ、その全容を表出することができたのではないかと思われる。

富倉徳次郎も、

作者は自らの生涯を決して愛欲に溺れた悲劇の生涯、敗北の生涯として否定しているのではなく、かえって尼姿の身が自らの愛欲の体験を堂々と正直に描きたどることによって、そこに彼女に与えられたその愛欲流転の生涯を女性の命として、それを高次の文学にまで高めることに成功している

といえるのである¹⁹⁾。

と、「愛欲流転の生涯を女性の命」として肯定していると述べておられるように、性を解放した女として、また自分の感情にも忠実にしたがった女として自由な生き方を選んだ開放的で自負心の高かった二条像をよくうかがい知ることができる。

おわりに

『とわすがたり』の中には、「夢」の語が66例ほど見られるが、そのうち、作者二条にかかわる〈夢〉の記述は、二条の〈夢〉8例、後深草院の〈夢〉2例、雪の曙の〈夢〉1例、有明の月の〈夢〉1例、すべて12例を数える。その二条の〈夢〉の内容を分類すると、①亡父雅忠に関する〈夢〉が4回、②二条の懐妊に関する〈夢告〉が3回、③亡き有明の月の〈霊夢〉が1回、④院との死別を予告する〈夢〉が1回、⑤その他の〈夢〉が3回、ということになる。

①は、最初と最後に現れる〈夢〉として、全編・全五巻の枠組みとしての機能を担い、作品の精神的世界の基調ともなっている。それは、庇護者＝後見としての父と、被庇護者としての二条の、父と娘の濃密な親子関係の構図を示すにとどまらず、安堵感と罪意識による不安感とを同時に暗示し、家＝後見＝経済的・生活的基盤の喪失感、他者の愛情そのものを後見に擬定せざるを得ない二条の生の不安定性、特定の対象への執着心を捨てて自由・自在に自己の生を伸長する方途、父の就縛から自己を解放し、精神的・身体的に飛翔し得る自己の存在の発見と提示など、さまざまな関係性を語りすすめながら、新たな「父＝父性の発見」へと収斂されるものであった。

②は、もっぱら後見たりえないという経済的事由と女としての本性から、母＝母性となることを拒否することによって子への執着心を断ち切り、自立・自由な個としての女の生き方を保持し、更には、懐妊や出産の事実を、罪意識によって〈隠すこと〉と、自己表出への欲求によって〈あらわすこと〉との二律背反と克服するものとして、他者の〈夢告〉によって語るという、新たな

〈語り方法としての夢〉、〈夢の方法化〉の発見をも開示する。

③④⑤においては、特定の愛人への期待や願望を放棄し、執着心の超克の彼方に、自己愛としての性の解放を措定してみせる。

こうして、『とはずがたり』の〈夢〉の記述は、あらゆる対象への執着心を断念し、個としての自己の主張と、自己愛としての性の解放の発見と実践をとおして、集団の制度的・秩序的な時空間の制約から解き放たれて、個としての祝祭的・反秩序的な時空間への転身の必然性を、余すところなく証言してみせる。

「中世的なるもの」を、小西甚一のいう「軌範性・権威性としての〈道〉」²⁰、更には、安良岡康作の指摘する〈理〉²¹として捉えることを許されるとすれば、『とはずがたり』の〈夢〉の記述は、まさに非中世的＝反中世的な〈個〉としての女性に目覚めた二条像を、鮮烈に刻印するはげしい世界の表現にはかならなかったのである。

注

①フィリップ・ルジュンヌ『フランスの自伝－自伝文学の主題と構造－』（小倉孝誠訳、法政大学出版局、1995・3）

②フィリップ・ルジュンヌ『自伝契約』（井上範夫・住谷在昶訳、水声社、1993・10）

③中川久定『自伝の文学－ルソーとスタンダール－』（岩波新書71、岩波書店、1979・1）

④今関敏子「とはずがたりにおける夢の記述をめぐって」（『いずみ通信』1988）

⑤藤井佐美「『とはずがたり』構想論－夢の記録をめぐって－」（『論究日本文学』64、1996・5）

⑥森田兼吉「夢よりもはかなき女流日記文学と夢」（『文学における夢』所収、笠間書院、1978・4）

⑦注6の論文で森田兼吉は12例、藤井佐美は注5の論文で16例をあげているが、私の調査では12例を数える。

⑧西郷信綱『古代人と夢』（平凡社、1993、6）

⑨注8と同じ

⑩高群逸枝『日本婚姻史』（至文堂、1963・5）

⑪脇田晴子『日本中世女性史の研究－性別役割分担と母性・家政・性愛－』（東京大学出版会、1992・5）

⑫寺尾美子「『とはずがたり』に於ける心情的基盤についての一考察－父と娘の心の交流をめぐって－」（『駒沢国文』、1984・2）

⑬飯沼賢司「中世前期の女性の生涯－人生の初段階の検討を通じて－」（『日本女性生活史2 中世』所収、東京大学出版会、1990・6）

⑭江口孝夫『夢についての研究』（風間書房、1987・2）

- ⑮森安理文「乱世の色好み（上）－二条女－」（『短歌』、1984・7）
- ⑯注11と同じ
- ⑰細川涼一『女の中世』（日本エディタースクール出版部、1989・8）
- ⑱飯沼賢司「女房と女流文学」（『日本女性の歴史文化と思想』所収、角川書店、1993・10）
- ⑲富倉徳次郎「とはずがたり解題」（『とはずがたり』所収、筑摩書房、1969・6）
- ⑳小西甚一「『道』－中世の理念」（＜講談社現代新書＞、講談社、1975・7）
- ㉑安良岡康作『中世の文学の探求』（有精堂、1970・10）

なお、『とはずがたり』本文の引用は、福田秀一校注『とはずがたり』（新潮日本古典集成）（新潮社、1978・9）に拠った。

討議要旨

今関敏子氏が、自伝と日記の違いや父の遺言についての問題点を指摘され、また二条は最終的に束縛されない女としての存在を獲得したのであって、一貫して解放された性を生きる女性として二条をとらえることの近代性について疑問を提起された。発表者は、それぞれについて自分の考えを述べられ、とくに二条は男性と関係をもった後、男性と対等の意識を持ち得ている、一人の男性と添うという意識は遠退いている、これはかなり早い段階から見られることだと答えられた。今関氏は、自伝と日記の違いを強調され、他の問題については後にゆずられた。